

現代英国の格差社会を生きるということ —ブレイディみかこの著作を通して—

藤岡美香子*

Living in the Disparities of Modern Britain —Through the Writings of Mikako Brady— by Mikako FUJIOKA

(Received: October 26, 2023, Accepted: December 18, 2023)

Abstract

The Japanese writer, Mikako Brady, placed herself in the lower class of British society and has been debating social inequality from the inside, from the perspective of a citizen. At the early stage of her stay in Britain, she was fascinated with its welfare system and the resilience of the lower class. However, during her nearly 30 year stay in the U.K., she has seen the country undergo great changes: the shift in its "cradle to grave" welfare policies through Margaret Thatcher's economic transformation, an increase in the number of unemployed, widening inequality, the Labor Party's policy of raising the lower class, the birth of left-wing governments in Europe which advocated anti-austerity and anti-EU policies, Britain's exit from the EU, class fixation, and more. Through an analysis of Brady's writings, it appears that her thoughts have become deeper and more political through these experiences. This is especially apparent after her experience of working at a nursery in the poorest area of the country. She seems to be continuing her struggle with the social problems using the power of words through her quest for the meaning of living in the lower class. It seems that these fights and the quest have led to a certain resignation on her part, but also the recognition that her place should be at the bottom of this disparity. She has come to understand that there still remains in people's mind the empathy to understand others and the spirit to survive adversity, which she finds attractive and precious.

Key Words : Intercultural understanding, Social disparities, British studies, Mikako Brady, Literature studies

1. はじめに

ひとりの日本人女性の目を通して見る英国社会について、2004年よりインターネット上で執筆を始めたブレイディみかこ。長年の英国生活を通してその思想には変遷が見られるが、本人が「この間、もっとも劇的な変化を遂げたのは、私の祖国ではないだろうか」と述べるように、氏の著述を通して紹介されていた英国の格差社会の現実とは、将来の日本の姿を予見するものとなっている。本研究は、ブレイディみかこの英国における異文化体験を3段階に分け、著作から、氏が英国へ渡り、定住することとなった背景、英国の格差社会の「底辺」に生きることを通して氏の思想がどのように変化し、「底辺」にどのような価値を見出したのかを分析し、階層化が進みつつある日本社会と対比し、考察することを目的とする。

また本研究は、London School of Economics 社会学部

Savage 教授の『7つの階級 英国階級調査報告』のような、研究者による格差社会の分析ではなく、日本人であるブレイディが、異文化の中で生活する一市民の視点で、「内側」から社会の格差や下層で生きる人々を描写する点を取り上げたことにより、これまでの研究結果を相補するものとなりうる意義を有すると考える。

2. ブレイディみかこについて

1965年生まれ。福岡県出身の作家であり、コラムニスト。音楽、特に英国のロックを好み、福岡県内の公立高校を卒業後、日本でのアルバイト生活と渡英を繰り返し、1996年から英国ブライトンに在住である。ロンドンの日系企業に勤務した経験もあるが、「底辺託児所」とあだ名される、平均収入、失業率、疾病率が英国最悪水準地区にある無料託児所に勤務し、後に、英国の保育士免許を取得する。氏が「わたしの政治への関心は、ぜんぶ託児所からはじまった」と述べているように、ここでの経験

*文理融合学部地域社会学科准教授

は、氏の思想に多大な影響を与えた。

執筆活動は、当初インターネット上での発信であったが、後に、本稿でも取り上げる『子どもたちの階級闘争 ブロークン・ブリテンの無料託児所から』（2017 みすず書房）、『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』（2019 新潮社）、『THIS IS JAPAN』（2020 新潮文庫）など多数が日本で出版されている。家族は、アイルランド系イギリス人の夫と『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』の「ぼく」として登場する息子である。

3. 異文化体験の3段階

本節では、ブレイディみかこの英国における異文化体験を3段階に分け、著作に見られる氏の思想を分析する。ただし、各期の思想分析に用いる著書内で取り上げられている時期とその発行時期とは必ずしも一致するものではない。

3.1 1期：英国に移住

ブレイディは日本の高校を卒業後、アルバイトで渡航と滞在の費用を貯めては英国に行くという生活を繰り返し、その後英国に定住することとなる。人の国境を越えての移動には「プル要因」「プッシュ要因」があるとされるが、『ジンセイハ、オンガクデアル』（2022a）、『オンガクハ、セイジデアル』（2022b）には、氏が英国に定住する経緯が記されている。

3.1.1 移住の「プル要因」

英国の音楽、特にロックが「プル要因」であった。氏が特に好んだグループであるセックス・ピストルズは、貧困層の若者が、メンバーの顔つきに自分たちと通じるものを感じ、「彼らは俺らの代弁者」（ブレイディ 2022b:30）と言ひ、また、ザ・スミスの音楽は氏にとって「英国の底辺階級の若者の恨み節にしか聞こえない」（ブレイディ 2022b:81）ものであった。時の政権や階級社会で締め付けられる下層を生きる人々の夢を代弁し、若者のみじめな日常を歌う英国ロックには、政治や社会への強いメッセージがあり、それに共感した氏は英国に引きつけられていった。

3.1.2 移住の「プッシュ要因」

氏は複数の著書に、日本で過ごした高校卒業までの生活は、経済的に厳しく、母親の精神的な不安定さも存在していたと記している。高校時代には、学校で禁止されているアルバイトをしていることが明らかになった際に、担任教師から「いまどき、バイトしないとバスの定期代がない家などあるわけない」と言われる。「一億総中流

と言われた当時の日本では、経済的に厳しい生活や貧困はないという幻想が社会に広がり、貧困の存在は不可視であったのだろう。自分の生きている世界の存在が認められていない、あるのに見えていない社会に自分が生きているという思いを抱いていた氏は、鬱積した思いの受け皿を英国の下層階級に見出す。「わたしは英国に来て、この階級に飛び込んで生活するようになって、とても気が楽になった。彼らは私と同じ階級の人々だったからである。日本と違っていたのは、この人たちは『自分にはお金がない』と高らかに言うことができ、貧乏人はここに確かに存在するんだとやかましくくらいに主張する」（ブレイディ 2020a:14）。日本社会で感じた「居場所の欠如」が氏を英国へ押し出した「プッシュ要因」だと言えるだろう。

3.2 2期：保育士として英国に定住

3.2.1 著書の概要

保育士として働くこの時期に、氏は英国社会の「底辺」に身を置き、下層社会の現実と日々向き合いつつ、政治への関心を深めていく。以下は、この時期のブレイディの思想が読み取れる著書の概要である。

『子どもたちの階級闘争』

平均収入、失業率、疾病率が英国最悪水準地区にある「底辺託児所」での保育士の体験で、氏は自身が渡英した真の意味を認識する。それは、日本の底辺で育った氏には無縁だった、福祉社会という階級の流動性を保証したワーキングクラスの誇りの拠り所であった。かつてサッチャーは、経済の転換によって犠牲になる人々に金だけ与えて無職者のアンダークラスを作った。その後ブレアの労働党政権が生活保護を与え続けて肥大化したこの階級は、政治信条のために活動するアナキスト系無職者の温床ともなった。しかし保守党の福祉制度見直しによって、無職者は空腹状態でフードバンクに並び、底辺託児所は幼児教育の機能を奪われて、単なる緊縮託児所に変貌する。

『THIS IS JAPAN』

アンダークラスの出現や下層社会でのモラルが低下した「ブロークン・ブリテン」にちなみ、英国メディアで「ブロークン・ジャパン」と呼ばれた日本の労働運動や生活困窮者支援の現場、保育園をブレイディが歩いた記録である。日本の労働争議の現場は、労働者が労働者に罵声を浴びせるような惨状があり、困窮者支援においては、「人間はみな等しく崇高」という英国に対し、日本では「支払い能力がある」という義務が条件として求めら

れることが、支援に関わる人々や当事者の姿勢の違いの根底にあると分析する。さらに日本では、保育園を始めとする日常の生活空間に「階級」が混在し、それを違和感なく受け止めて暮らす人々の姿を一種の驚きを持って受け止める。

『ヨーロッパ・コーリング』

ブレイディが格差社会の問題を政治的な側面から考察した著作である。1部では、保守党政権下で進む英国の格差社会の歪みを、子どもの虐待、経済的損失、ホームレス差別の点から指摘し、2部では、反緊縮と反EUを掲げて欧州各地で誕生した左翼政権や労働党新党首コービンの動向を取り上げ、3部ではイギリス労働者階級の自らの階級への誇りと本格的左翼の政治家コービン党首を生んだ草の根的地域活動に触れる。

『女たちのテロル』

ブレイディが「本人たちに呼ばれている」感覚を覚え、大正時代に国家と対決したアナキスト金子文子、20世紀初頭に英国で女性参政権を求めて戦った活動家エミリー・ディヴィソン、1916年アイルランドのイースター蜂起でスナイパーとして戦ったとされるマーガレット・スキニダーについてまとめた。金子文子に代表される3人の女性は、『子どもたちの階級闘争』の底辺託児所の子どもたちの分身として描かれ、さらに氏がよく使う「アナキズム」の意味を、「テロル」という言葉を通して説明している。3人の女性はいずれも社会に居場所がない「無籍者」で、「テロル」によってオルタナティブな場所を求める。それは法の支配を否定するアナキスト的な思想につながるが、エミリーのサブジェクト運動のように、議会政治の実現を否定する訳ではない。それは下層の人々の救済を議会政治にも求める氏のアナキズムに共通する矛盾でもある。

3.2.2 2期におけるブレイディの思想の概要

サッチャー時代以前の英国労働者階級には、「気前の良さ」と勤勉さ、そして高潔さがあった。コミュニティがあり、貧しくとも佇まいを正して生きる、労働者階級のプライドがあった（ブレイディ 2022b:181-182）との評価がある。しかし、サッチャー政権の経済転換で失職した多くの人々により、働かない「アンダークラス」が形成される。労働党政権は、若年妊娠、ドラッグやアルコール、暴力等の問題を多く抱えるアンダークラスに手厚く生活保護を支給しつつ、下層の人々の引き上げに力を入れる。英国の下層階級に自分の居場所を見つけたブレイディが勤務する、劣悪な環境の中で運営される「底辺保

育所」も、貧困層の人々の保育、教育環境の改善政策のもとに誕生したものである。働きながら保育士資格取得を目指す人への支援も充実していたが、2010年以降、政権をとった保守党の緊縮財政、福祉制度の見直しで、生活保護や失業保険は大幅に削減され、貧困層支援のための多くの施設も閉鎖や規模縮小を迫られる。

英国の、特に、下層社会に飛び込み、自分と同じ環境で、貧しいながらもエネルギーに声を上げて生きる人々の社会に自分の居場所を見出したブレイディであったが、この時期に、経済主義一色の保守党政権の政策により圧迫される大人、そしてその子どもたちと過ごす中で、社会階級を分離基準とした差別である「ソーシャル・レイズム」が厳然と存在することを認識し、その現実と直面する。富者と貧者の町は分かれており、両者が同じエリアを歩いていることはない（ブレイディ 2020a:206）。また、英国の保育所では、保護者からのクレームや園の評判低下、運営状況悪化の懸念から、ミドルクラスと貧困層の子どもたちがともに保育を受けることは難しい。裕福な子どもたちと貧しい子どもたちが分離され、触れ合うことがないまま生活し、成長していく「ソーシャル・アパルトヘイト」が進む。一方、久しぶりに長期帰国した日本では、英国では考えられない「階級」の混在があった。同じ地域に高級住宅と簡易宿泊所があり、月々の保育料の最高額を支払う家庭の子どもも保育料免除の子どもも一緒に同じ園で保育を受ける。また、地域のホームレスの男性と子どもたちが日常的に交流を続ける園が存在するなど、日本においては、世界的に進む「上」と「下」の明確な分断がなく、それを人々が違和感なく受け止めている姿を「唐突に覗く風穴」（ブレイディ 2020a:146）と捉えている。

生活困窮者支援においては、「瘠猛さがあり、全身で戦っている」英国の困窮者に対し、日本の貧困者は「一人前の人間でなくなったかのように、ひっそりと静かで、すでに折れてしまっている」（ブレイディ 2020a:232-233）ことが多い。根底に、欧州では「人間はみなうまれながらにして等しく厳かなものを持っており、それを冒されない権利を持っている」という基本的な権利の考え方が根付いているが、日本では、「支払い能力があること」が尊厳であり、義務を果たさなければ権利が得られないと、困窮している本人たちが最も強く感じている（ブレイディ 2020a:240）ことがある。

このような中、氏は、地道に活動を続け、社会を変えるために現場から問題提起し、政府に向けて提案もする、英国の草の根の市民活動、「下」どうしの助け合いに成熟とプライド、力強さを感じる。そして、そこに自身の中にあるアナキズムと共鳴するものを見出し、格差社会の

「底辺」に留まることを選択したと筆者は考える。

3.3 3期：英国で子育てをしながら、執筆活動、日本で連載

3.3.1 著書の概要

2004年以降、インターネットを中心に著述活動が続け、日本において複数の書籍が発行されていたブレイディへの関心は、2019年『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』により高まり、これ以前に出版された著書も改めて注目されることとなる。以下は、この時期のブレイディの思想が読み取れる著書の概要である。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

ブレイディ氏の息子「ぼく」は、カトリック系の名門小学校を卒業後、11歳で地元の「元底辺中学校」に進学する。平和でミドルクラスを象徴するような環境の小学校と異なり、この中学校は、人種差別、いじめ、暴力といった英国社会を反映する環境にあり、本著には、そこで迷い、悩みながら成長する息子の日常が書き綴られている。1つ1つのエピソードは、分断、多様性、多民族国家、社会階級問題など、現代の英国が抱える葛藤や衝突とそこで生きる人々の姿を描く。その中で、必修科目「シティズンシップ・エデュケーション」の期末テストで問われた「エンパシー」に関する母子の会話は、ブレイディが耳目を集めることとなった本著の中でも特に注目され、社会における格差、分断が進む現代社会を生きる我々に必要な概念として認識されるきっかけとなる。

『ブローケン・ブリテンに聞け』

EU 離脱やパンデミックで文化的／政治的混乱を極めた2018～2020年のブローケンなイギリス社会をレポートする。まずは文化的混乱によるUK コメディイの変化である。ブレグジット投票後、英国の右翼・左翼の定義が変わり、あらゆるクラスの不徳徳が笑いの対象となり、それまでリベラルや左翼が多かったコメディイ業界に右翼の漫談が参入する。さらにグローバル化の進展で土着の構造が崩れ、ビートルズ以来のUK ミュージックは消滅の危機を迎える。次なる政治的混乱では、労働党の心臓部と呼ばれるイングランド中北部の離脱派労働者が労働党を見捨て、2019年の総選挙で労働党が大敗して、コービン党首が退陣に追い込まれる。その間にも、緊縮政策を進める保守党政権下で子どもの貧困が増大する。

『他者の靴を履く アナーキック・エンパシーのすすめ』

エンパシーとは、シンパシーの安易な共感ではなく、

他者を他者として理解する能力で、西欧の伝統的なシティズンシップの根幹にあるとされる。氏はその概念を、格差社会で見捨てられた人々が自分の生き方を追求するために他者に寄せる連帯（アナキック・エンパシー）に当てはめる。一方、1945年以来の英国の福祉社会を壊したサッチャーは、中流階級出身で、公立の学校からオックスフォードを経て政界入りし、自身のように自助で成功した人々にシンパシーを感じることはあっても、自助ができない下層の人々にエンパシーを持てなかつたと言われている。自助を求める新自由主義の緊縮政策から生まれた格差社会が、コロナ感染拡大で行きづまり、ケア階級の出現を生んだことに関して、氏は利己の追求は利他とつながらなければ成り立たない一例と考える。

3.3.2 3期におけるブレイディの思想の概要

3.2.2に記したように、2期において、政権の経済政策に翻弄され、分断が明確化する英国の格差社会の中で、助け合いながら力強く戦う「底辺」の人々に共感し、自分の居場所として選択したブレイディは、その後も「底辺」「地べた」から、自分の階級、英国社会、そして、日本を初めとする「外国」の情勢を見て、発信を続ける。筆者は、底辺保育所を離れ、子育てをしながら執筆する3期において、そのまなざし、姿勢に2期とは変化があると考えられる。

それは、政治的な思想が深まる中で現れている、問題を大局的に見つめる客観性の増大と一種の諦念である。

『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』の中で、息子の目を通して見た社会問題を親子で語る形式を取っていることが影響している可能性はあるが、「地べた」にあり続けながら、その「底辺」のこゝろを含め、社会全体の問題を、以前とは異なる距離を持って論証していると思われる。『ブローケン・ブリテンに聞け』にあるように、氏は英国のEU 離脱や世界的なパンデミックという、個人やその連帯では対処できない大きな流れを受けての政治と文化の混乱を目の当たりにする。渡英当初に高揚感を持って見た英国の福祉社会は、緊縮政策により様変わりした。欧州各地の左翼政権や労働者階級は退潮し、保守政権に見捨てられた英国の下層階級は肥大化した。かつて貧困からの脱出ルートの一つであった音楽やジャーナリズムの世界も、中流・上流階級のエリートや2世たちに占領され、「上」と「下」の分断は進み、階級は固定化した。氏はこの状況に落胆しているようにも思えるし、古典的な労働党的な施策は時代遅れであり、実現を期待するのは非現実的なのではないかという諦念を持ちつつあるように見えるのだ。

だが、決して絶望しているのではない。『他者の靴を履

く『アナキック・エンパシーのすすめ』には、氏が、貧しいながらもエネルギーにあふれ、アナキな英国の下層階級の人々に抱いた、渡英初期の感動や共感から、現実に対する無力感や失望までが描かれている。しかし最終的に、格差社会で見捨てられた人々が、コロナ感染拡大という更なる窮地に追いやられて見せた連帯は、他者を理解し、利他の行動をとるエンパシーの表れであり、その姿に、氏は改めてそこが「私の階級」であることを認識している。分断、階級の固定化、下層階級の肥大に、焦燥感や無力感を持ちつつも、現実を受け入れて、その中で諦めずに生きていくとの決意に至っているように見える。

4. まとめ

本稿は、ブレイディみかこの英国滞在を3期に分け、著作から氏の思想の変遷を分析した。日本での生活に居場所を見出せなかった氏は、下層階級の若者が、政治や社会へのメッセージを歌う英国ロックに惹かれ、英国の福祉社会、草の根の市民運動、豊かでもなくともプライドを持って生きる労働者階級に感動し、英国の下層階級が自分の居場所であると認識する。その後「底辺保育所」での勤務をきっかけに、この思いが強まるとともに、政治への関心が深まっていった。筆者は、ブレイディは、政治的には「反緊縮政策の実現」を目指し、哲学的には社会の「底辺」で生きる意味を模索し続けたのではないかと考えるが、本稿において渡英後の思想の変化を検証した結果、政治的な「反緊縮政策の実現」に関しては、非現実的である可能性を認識しつつあるように見える。一方、底辺で生きることに関しては、英国社会では、政権の交代、社会構造の変化で「ソーシャル・レイシズム」が増加し、「ソーシャル・アパルトヘイト」が存在する。それでも、政府をあてにしないたくましさや連帯、生まれながらに有する基本的人権の理解は、「底辺」から完全になくなってはいない。氏は「英国人の逆境を生き抜く気概」を意味する Brit Grit という言葉を好む。grit とは長期的な目標達成のために情熱と忍耐を持ち続ける力とされる。つまり、政権や社会の変化に翻弄されても、人間は生まれながら崇高であることが実現される社会を目指す忍耐力が Brit Grit なのではないだろうか。「どんなに状況がひどくとも、現状をのりしりながら、たくましく生き抜いている。自分はこの Brit Grit に魅せられ、懐かしいものを感じ、英国について書くことをやめられずにいる」(2022b:323) のである。「底辺」の持つこれらの価値を尊重することが、そこで生きる意味だと認識している。

また、英国の「底辺」の生活が日本にとってよそ事ではなくなりつつある状況を憂えてもいる。日本において社会保障を担ってきた家族という機能は弱体化し、非正規雇用や派遣労働で路上生活一歩手前の人々やブラック企業での経験で心身を病むケースが増加している。「どん底手前の人々」が多いにもかかわらず、人々は危機的な状況から目をそらし、特に若者が行動を起こさない。貧困者は、自他ともに「自己責任」だと力なく現状を受け止める。そのような祖国日本に暮らす人々に「アナキな社会が、全てのコンセプトや枠組みが風化した後の無秩序&無方向なカオスだったとすれば、そのアナキを生き抜く人間に必要なのはグリットだ」(2022b:323) と英国の「地べた」からエールを送っている。

謝辞

本稿執筆にあたり、東海大学文理融合学部経営学科教授の小松敏弘先生に英国政治に関する貴重な資料のご提示をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

参考文献

- 梅川正美 (1997) 『サッチャーと英国政治 <1> 新保守主義と戦後体制』成文堂
- サベージ, M. (船山むつみ訳) (2019) 『7つの階級 英国階級調査報告』東洋経済新聞社
- セルドン, A. (土倉莞爾・廣川嘉裕監訳) (2012) 『ブレアのイギリス 1997年～2007年』関西大学出版
- ブレイディみかこ (2013) 『アナキズム・イン・ザ・UK 壊れた英国とパンク保育士奮闘記』P ヴェイン
- ブレイディみかこ (2016) 『ヨーロッパ・コーリング 地べたからのポリティカル・レポート』岩波書店
- ブレイディみかこ (2017a) 『子どもたちの階級闘争 ブロークン・ブリテンの無料託児所から』みすず書房
- ブレイディみかこ (2017b) 『花の命はノー・フューチャー Deluxe Edition』ちくま文庫
- ブレイディみかこ (2019a) 『女たちのテロル』岩波書店
- ブレイディみかこ (2019b) 『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』新潮社
- ブレイディみかこ (2020a) 『THIS IS JAPAN 英国保育士が見た日本』新潮文庫
- ブレイディみかこ (2020b) 『ブロークン・ブリテンに聞け』講談社
- ブレイディみかこ (2021a) 『他者の靴を履く アナキック・エンパシーのすすめ』文藝春秋
- ブレイディみかこ (2021b) 『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー2』新潮社
- ブレイディみかこ (2021c) 『ヨーロッパ・コーリング・

リターンズ 社会・政治時評クロニクル 2014–2021』

岩波書店

ブレイディみかこ (2022a) 『ジンセイハ、オンガクデア
ル』 ちくま文庫

ブレイディみかこ (2022b) 『オンガクハ、セイジデア
ル』 ちくま文庫

ブレイディみかこ、鴻上尚史 (2021) 『何とかならない時
代の幸福論』 朝日新聞出版